

大学等名 藍野大学

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

教務委員会

(責任者名) 平山朋子

(役職名) 委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムは2科目とも必須科目であり、令和6年度履修学生は全学生の24%である。令和7年度以降も引き続き科目配当年次の学生が全員履修する状況を維持する予定である。
学修成果	本学で行っている授業に関するアンケートとともに、本教育プログラムの対象科目の途中で演習課題と最後に行う定期試験で授業の理解度を確認している。 授業に関するアンケートでは、「あなたにとってこの授業の難易度は適切ですか」、「予習復習(準備や課題を含む)の時間は授業1回あたり、平均してどのくらいの時間がかかっていますか」、「あなたはこの授業に前向きまたは意欲的に取り組んでいますか」など、全15項目の質問項目を設けている。これらも参考に、総合的に学修成果の評価を行っている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	本学では個々の授業改善に役立てるために各授業の中間時点で授業に関するアンケートを実施している。「あなたはこの授業の到達目標(シラバス記載)をどの程度達成できそうですか。」という問いに対し、本教育プログラムの対象科目の令和6年度の結果は、4件法(全くそう思わない:1点～非常にそう思う:4点)で3.31となっており、学生は概ね内容を理解できていると思われる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本プログラムは全学科の全学生を対象とした必須科目であるため、学生アンケートを通じた後輩等他の学生への推奨などは行っていない。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは、2科目とも全学科の全学生を対象とした必須科目であるため、令和7年度も引き続き全学生が履修する予定である。

<p>学外からの視点</p>	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本プログラムの修了者は非輩出のため、進路・活躍状況、企業からの評価を把握することはできていない。現在、卒業生が就職した病院、企業などの上長に、本学の卒業生の活躍の状況などに関するアンケート調査を行っており、今後、本プログラムの修了者についても状況把握を行う計画である。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>数理・データサイエンス・AIの基本的な活用能力を身に付け、医療や福祉の現場においてその力を発揮し、新たな価値の創出や地域・社会が抱える課題の解決に取り組む人材の育成は、保健医療分野においても今後ますます高く評価されることが期待される。そのため、本学では、数理・データサイエンス・AI教育プログラムの内容や教育手法について、医療の高度化・多様化や社会のニーズを的確に捉えながら、常に改善・進化を図る計画である。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」や「学ぶことの意義」として実感できるようにするためには、実際の医療・保健・福祉の課題を題材とした経験学習を取り入れた教育内容の開発が極めて有効であると考えられる。特に、電子カルテや地域医療データ、生活習慣病予防に関する統計情報などを活用しながら、データに基づいた意思決定やチーム医療の中での活用方法を学ぶことにより、学生の主体的な学びと実践力の育成が期待できる。また、学生が身近に感じられる事例や地域課題を取り上げることで、医療系の専門職を目指す者として、データサイエンスの視点が医療の質向上や患者支援にいかに関与し得るかを体感できるような教育設計を重視していく必要があると考えている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること  ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>医療系大学においては、学生が数理・データサイエンス・AIの知識を「自分ごと」として捉え、医療・福祉の現場における課題解決に役立てられるよう、「わかりやすく、意味のある授業」の提供が不可欠である。教育内容の専門性や水準を維持・向上させるとともに、内容の可視化、医療現場に即した事例の導入、ならびにアクティブラーニングや演習型授業の充実を図る。 その実現に向けては、学生からのフィードバックを重視し、定期的なアンケート調査により、授業内容や教材の理解度、関心度、実用性に関する評価を可視化し、改善に反映する。また、教員に対しては、数理・データサイエンス・AIの教育内容と、医療との接続を意識したFD研修会を企画・実施し、授業設計や教授法に関する共通理解を深める。</p>